

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

新体操促進運動における第3 回芸術教育会議（1905）の意義

著者	安則 貴香
著者別名	Yasunori Yoshika
雑誌名	経営論集
号	81
ページ	195-210
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004491/

新体操促進運動における第3回芸術教育会議（1905）の意義

Significance of the 1905 Third Arts Education Conference on Advancement of Rhythmical Gymnastics Movement

安 則 貴 香

1. はじめに
2. ドイツの学校・社会体育におけるシュピーズ＝マウル方式の全盛
3. 第3回芸術教育会議（1905）開催に至る経緯
 - (1) ドイツにおける新教育運動の興隆
 - (2) 芸術教育運動と第1回・第2回芸術教育会議の開催
4. 第3回芸術教育会議の実際
 - (1) プログラム構成
 - (2) 第3回芸術会議に見る新体操の理念の主張―体操と音楽と美の融合を求めて―
 - (3) 第3回芸術教育会議の意義
5. おわりに

1. はじめに

我が国における戦後体育の理念は、全体的画一的教育から個別的創造的な教育へ、教師中心の一斉指導から児童中心の自主的学習へと移行したが、この理念を最も象徴的に示し、具現化しているのが「ダンス」領域とみられる（松本, 2008, p.208）。従来行われていたダンス教育は、戦後一定の型を受け入れる既成作品の一斉指導から、自己表現を引き出す自主創造的教育へと変革し、自己表現を拓くという人間の「生」の欲求に応じた芸術的創造的な教材へと移行した。表現運動であるダンスは、他の運動領域のように一定の技術を獲得する方向への志向だけでなく、個々の欲求に応じて新しいリズムカルな動きの体験と喜びをもたらすことができ、体育の中でも芸術的創造的な運動の実現という独自の特色をもっている。文部科学省の学習指導要領改訂により平成24年度から中学1・2年生の保健体育において、男女必修化されたダンス教育は、量的拡大だけでなく、さらに質的拡大にも発展をもたらすとの期待は大きい（中村, 2012, p.18）。我が国のダンス教育の質的発展のためには、ダンスに求められる人間の「生」の欲求に応じた自主創造性の身体教育について一度振り返る必要があると思われる。それによって、今後のダンス教育に関する理念や運動形成に向けた指導実践に多くの示唆を与えることができると考えるからである。その原点は、19世紀末から20世紀初頭に体操家や舞踊家、音楽家らの新体操諸流派⁽¹⁾によって、新しい体操として具現化した新体操促進運動（Gymnastikbewegung）に遡らなければならない。

新体操促進運動は、20世紀初頭、ドイツをはじめヨーロッパ各地で自然主義への回帰および人間性の回復を目指した生活の様々な側面に関わる改革運動が展開される中で、運動のリズムや表現を重んじた人間の本質への問い直しという基本的な観念をも

ち、ドイツの学校体育の中で広く実施されていた形式的体操の克服を目的として、新教育運動の一つである芸術教育運動を端緒に興隆した。当時の学校体育で実践されていたシュピース＝マウル方式の体操（トゥルネン, Turnen）は、身体形成のために画一的形式的な動きを行うだけで、人間の自然な表現能力の保持や自然な発達に合った身体教育とは趣を異にしていたのである（A.リヒトヴァルク・岡本訳, 1985, p.17）。この状況の克服を目的として、1905年に「音楽と体操」（Musik und Gymnastik）をテーマにした「第3回芸術教育会議」（Der dritte Kunsterziehungstage）が開催され、これを契機に音楽と結びついた新たな体操が体操家や舞踊家、音楽家らによって組みまれ、新体操促進運動として興隆していった。そして新体操促進運動は、その後の身体教育に多大な影響を与え、今日行われている「新体操競技」誕生の原動力になり、古典バレエから脱したモダンダンスの礎となり、さらには戦後ドイツ・オーストリアにおいては自然体育として学校教育に組み込まれ、我が国においても新体操促進運動から進展した自然体育は現代体育の源流として今も息づいている。しかし新体操促進運動の興隆する契機となった「第3回芸術教育会議」について、従前の研究ではその実態が詳細には明らかにされていない²⁾。そこで本研究の目的とするところは、19世紀から20世紀初頭の学校体育を支配していたシュピース＝マウル方式の体操の克服を目的として開催された同会議のプログラム構成とその内容、そして同会議のもつ意義を明らかにすることである。

2. ドイツの学校・社会体育におけるシュピース＝マウル方式の全盛

ドイツ国民体育といわれるトゥルネンが正式に誕生したのは、ベルリンの郊外のハーゼンハイデに体育場が開設された1811年で、教師をしていたヤーン（F.L. Jahn, 1778-1852）を中心に始められた。ヤーンの実践したトゥルネンは、走・跳・投などの陸上競技的な運動、器具を用いた体操³⁾、その他に水泳、剣術、遊戯、ハイキングなどであり、これらの活動をヤーンは、学校外の自主的な社会体育活動として位置付けた。そして彼は、各地域別のクラブ組織であるトゥルネンクラブを結成、その会員をトゥルナーと呼んだ。トゥルネンクラブの会員数は急速に増え、トゥルネンはプロイセンの政府によって積極的に受け入れられた（稲垣, 1987, p.849）。しかしヤーンの家国統一、身分制度の撤廃、多面的調和的人間形成というトゥルネンでの社会体育の政治的教育的意図は、プロイセン政府と利害が対立するようになり、後に反政治体制の象徴と見なされ、トゥルネンはプロイセンをはじめ他の連邦国において1819年に禁止されることとなった（木村, 1989, p.91）。トゥルネン禁止令（Turnsperre, 1820-1842）の期間は、トゥルネンは非政治的な名称 Gymnastik（体操）に変更し、トゥルネン活動のうち政治的な性格をもつ部分をすべて排除して活動を継続していたが、そのことによってトゥルネンの運動内容が貧困になったとされる（木村, 1989, pp.91-92）。

トゥルネンは、1842年にトゥルネン禁止令が解除されてから、従順で奉仕的な臣民・軍人形成とした国民教育に必要な不可欠なものとして社会体育だけでなく、学校体育成立に多大な影響を与えるようになった。「ドイツ学校体育の父」と呼ばれているシュピース（A.Spiess, 1810-1858）は、ヤーンのトゥルネン活動から運動の中心を徒手

体操や手具体操、集団運動に移行させ、集団秩序体操（Ordnungsübung）を内容とする学校体育設立に指導的な役割を果たした。当時のヨーロッパ列強は、帝国主義の道を歩み、軍事強化とともに権威主義が一世を風靡している時期であった。ドイツにおいても産業都市化の急速な進展に対し、国家経済を支える労働力のために、国家の軍事力強化を目的として健康で命令に従順な兵士の養成に向けた身体育成の必要性から（松尾, 2010, p.8）、シュピースは「規律と秩序（Zucht und Ordnung）」による陶冶を教育の本質的課題と考え、集団秩序体操を重んじた（木村, 1989, p.92）。シュピースの理論と実践は、学校と社会の体育に徐々に浸透していき、彼の弟子であるマウル（A. Maul, 1828-1907）によって完成された（東京教育大学体育史研究室編, 1964, pp.118-124）。マウルの学校体育は、クラス、年齢、性別、能力に応じて系統的に教材を配列し、反復練習によって各運動を正確かつ美しく実施できるよう、明確にこまかく記された教授体系によるもので器械体操を中心に、集団秩序体操、徒手体操、棒体操、走・跳などであった。マウルの運動の特色として有名なのは、シュピースの運動体系と同様に、合図に従って一斉に実施する集団運動で、彼はシュピースの集団秩序体操をもとに 5 段階の指導の型に確立させた（成田, 1975, pp.153-154）。

1870 年代には小学校にも体育が教科として採用され、各地域別のクラブ組織であるトゥルネンクラブが統合され、ドイツトゥルネン連盟（Deutsche Turnerschaft）として全ドイツ的組織化に達成するときであった。マウルは、1875 年にドイツトゥルネン連盟委員、1887 年にはその初代会長にも就任しており、ドイツ近代学校・社会体育の成立期に、シュピース＝マウル方式のトゥルネンがそれを支配し、「軍人帝国」ドイツの体制強化の一翼を担って、第一次世界大戦に至るまで学校体育を支配し続けた（成田, 1975, p.154）。

このような学校体育の様相を呈しながら、19 世紀後半のドイツでは人間の自然性と自由の精神に結びついた遊戯やイギリス産のスポーツ活動⁴⁾、スウェーデンやデンマークから、医学や解剖学、生理学、衛生学の最新の成果を体操の中に応用しながら、健康の保持・増進に役立てるために体系化された徒手体操をはじめとする北欧体操の伝播、また女子の身体教育の重要性が強調され始めた時代が到来した（稲垣, 1987, p.449）。これらは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、学校や社会体育に、遊戯・スポーツ活動や北欧体操といった新しい動きが導入され始める契機となり、本研究の第 3 回芸術教育会議（1905）は、その真っ只中で開催されたと言える。

3. 第 3 回芸術教育会議（1905）開催に至る経緯

(1) ドイツにおける新教育運動の興隆

1871 年にドイツ帝国の成立という形で政治的な統一をなしとげたドイツは、ヨーロッパにおいては後進資本主義国として何よりも経済の発展と国力の増強に力を注ぎ、それにより 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、科学や技術が飛躍的に進歩し、物質文明至上主義と合理主義的思考様式が台頭した（平野・長尾, 1988, p.54）。このような社会情勢において、学校は教師中心の生徒に対する文化伝達場であるに過ぎず、当時のドイツの教育形態では、授業中のドリル学習や強制的処置、教育における画一主義や形式主義、見せかけの教師の優位性、子どもの人格発達への抑圧などの結果と

して、思考力、知識、自主性、創造性を育てる余地はなかった（木内・アンドレアス、2010, p.2）。この状況全体に対して鋭い批判の矢を放ったのが教養批判を主要な内実とした文化批判の運動であり、人間の生の全体性の回復と個性的・創造的発達を目的とする新教育運動（reformpädagogische Bewegung）であった。

新教育運動は、伝統的な教育と教育観の行き詰まりを実感していた教育学者と、新しい教育観や文化観に鼓舞されていた若い世代の教育学者達に強烈なインパクトを与え、彼らはこの運動の中で育まれた児童観、教育観、教育の新しい在り方そのものを学び取り、後に新しい教育学の端緒を創り上げていくこととなった。新教育運動における教育形態は、画一的一斉教授から個性的合科教授へ、教育方法としての主知主義（書物主義）・注入主義から活動主義（事物主義）・自学主義へ、教師中心主義から児童中心主義へ思弁の哲学的教育研究から実験的科学研究へ等々に及び、初等学校教員から、アカデミズムの学者や文化機関・行政機関関係者までを巻き込んだ国民的教育運動として発展し、その影響力と層の広さ、学問的水準の高さにおいて特異な位置を占める教育運動を創り上げていった（鈴木、1999, p.37）。そして、新教育運動の中で子どもとその能力の最大限の尊重という方向を最も早くに明示し、これをすべての学校改革や教授計画の一原理とするのに決定的な契機を与えたのは芸術教育運動であった（A. リヒトヴァルク・岡本訳、1985, p.17）。

（2）芸術教育運動と第1回・第2回芸術教育会議の開催

初期の芸術教育運動は、19世紀中葉に造形美術家たちから生じた。彼らは、当時の学者的理想を掲げた形式主義の圧力のもとで、いかに自分たちの独創的な芸術能力が失われたかを感じ取り、それを乗り越える方向に新しい理想を見出していた。従来の教養や文化に対する闘争が、まずは芸術家たちの独自の生存のために、そしてドイツ人一般とその人間性のために芸術教育運動が台頭した。その運動は、主知主義からの離反を表明し、身分や社会的業績とはかかわりなく、感性や身体に対する根源的なものである表現に向けた新たな価値を見出すものであった。そして19世紀後半に至り、この表現に向けた新たな価値は、自然や郷土に対する新しい関係や、医学的観点、ドイツの工芸の経済的・実務的必要性等の影響を受けながら教育的な方向での芸術教育運動が興隆してきた（ノール・平野訳、1987, 119）。この教育的方向性での芸術教育運動は、母国語であるドイツ語、音楽、図画、体育などの授業を内容的、方法的に構成していくうえで貴重な刺激となったばかりでなく、教育における子どもの主体的位置づけを前提としていた。それは、子どもが本来知的な学習に興味を持つ知性的存在であるだけでなく、何よりも豊かな芸術的才能をもった創造的で感性的存在であるという捉え方であった。

芸術教育運動は、先ず1896年のハンブルクにおける「芸術教育保護の為の教員集会（Lehrevereinigung für die Pflege der künstlerischen Bildung in Hamburg）」で明確な組織的な運動となり、その後の3回にわたる芸術教育会議により、芸術教育運動はドイツ全土に拡大していった。その中心的な役割を果たしたのがA. リヒトヴァルク⁵⁾であった。彼は芸術教育運動を、教師を主体とする組織的運動へとつなげることで、固有な教育運動へと転化させ、この運動の全ドイツ的規模での成立に決定的な

役割を果たした (A. リヒトヴァルク・岡本訳, 1985, pp.36-37)。そして芸術教育運動は、20 世紀初頭の 3 回にわたる芸術教育会議の開催によってドイツ新教育運動の推進力となった。新教育運動として成立した最初の分野が芸術教育の分野であり、この会議を大きな区切りとして芸術教育の理念は、この後に続くドイツ新教育運動に発展的に継承されていった (A. リヒトヴァルク・岡本訳, 1985, p.35)。

第 1 回芸術教育会議のプログラムの中心は、1901 年 9 月 28 日・29 日にドレスデンで「造形芸術 (bildende Kunst)」をテーマに開催された。この会議には約 250 名の幅広い階層の人々が参加し、政府機関関係者や市当局の代表者の多くが出席した。第 1 回芸術教育会議では、図画教育の教育的意味についての理論的基礎づけがなされた (鈴木, 2001, pp.31-32)。そして会議のプログラムの中心は、学校や家庭での青少年における芸術教育に関する課題を取り上げたチュービンゲン大学教授である K. ランゲの講演「芸術的な教育の本質から」とリヒトヴァルクの講演「未来のドイツ人」であった (Diem, 1991, p.15)。ランゲは、芸術教育の本質を「青少年の問題」と位置づけ、子どもたち一人一人の「享受能力」や「美的享受能力」に向けた教育を行うことが重要であると強調した。そして、芸術を理解していない教師によって多くの学校では、授業が子どもたちの精神を殺すような仕方で行われているとして、伝統的装飾文様や、抽象的な空間形式を模倣する図式的な図画教育を批判した (Konrad, 1902, p.30)。リヒトヴァルクは、学校改革のすべてが教師の在り方にかかっており、教師の影響力の核心は、教師が授業において展開する生き生きとした力であると主張した (A. リヒトヴァルク・岡本訳, 1985, p.191)。教材と、指導技術、より創造的な図画教育の実践不足は否めないものの、第 1 回芸術教育会議の成果としては、はじめて芸術教育について理論的に討論されたことであった (鈴木, 2001, pp.31-32)。

第 2 回芸術教育会議は、1903 年 10 月 9 日から 11 日までワイマールで「母国語と詩 (Sprache und Dichtung)」をテーマに開催された。この会議には 225 名が参加し、第 1 回会議と同様に政府機関関係者や市当局の代表者と多数の教員連盟の代表者たちが出席した (歡喜, 2004, p.3)。第 2 回の会議では、言語芸術である詩や作文の表現能力を中心に討論され、子どもたちの日常的経験や子供らしい観点、周囲世界の観察による「自由作文」などの実践報告がなされた (歡喜, 2004, pp.6-7)。リヒトヴァルクは「芸術的な教育の統一」と題する講演を行い、その際、次回の第 3 回芸術教育会議のテーマは「音楽と体操 (Musik und Gymnastik)」について討論する予定であると宣言して、学校における体育授業について以下のように述べた (Lichtwark, 1929, p.123)。

「子どもは、学校に行く前は、大昔から人間が受け継いできた性質である遊びや踊りの中で、身体と意志の諸能力を発達させきた。このような本来の遊びや踊りの源泉を認めない体育によって、都会の子どもは遊びや踊りとつながりが断絶してしまい、この遊びや踊りの中での生き生きとした諸能力が、眠ってしまい、枯れてしまうのである。なぜなら、どんな身体的な努力も体育のことを思い出してしまい、つまらない気持ちになるからである。」

さらに彼は、第3回芸術教育会議のテーマの一つである「体操 (Gymnastik)」についても次のように述べている (Lichtwark, 1929, p.124-125)。

「体操の中では、ドイツ的な方法でもイギリス的な方法でも我々の欲求を満たすことができない。両方ともに美学的な要因が欠けているのである。我々のトゥルネンは、中身の無い教師ぶった人間の中で硬直化している傾向があり、それを魅力的に蘇らせるということは、天才的な教育的素質が必要である。イギリスのスポーツと競技はまだ人間的であり、ますますドイツ国内で行われているトゥルネンの基盤を脅かしている。その中で今日の形態での目標は、同様に、粗野な19世紀的な諸要因を断ち切る必要があり、トゥルネンがどのように健康の育成に目標を向けるかなのである。(中略) 両方の方法に有する脅威と一面性なもののから、野蛮な力とか競争による最高記録を達成させるようなものではなく、何よりも音楽との関わりを通して表現の発達や、主として美しさを目標とするような体操の新しい形態だけが我々を救うことができる。それゆえ新しい体操の中心になるのは、それは19世紀以前の時代にかつて踊られた舞踊に、我々がこれまでに獲得した能力から自由に芸術的に至るような舞踊を目標にすることなのである。」

つまりリヒトヴァルクは、身体教育に対しても創造的で感性的な教育を必要とし、学校体育で実施されているトゥルネンに異議を唱え、集団秩序体操を主とした体育を芸術教育として改革するには音楽との関わりを通じた表現の発達を目標とした新しい体操によって達成できると考え、第3回の芸術教育会議のテーマの一つに「体操 (Gymnastik)」を取り入れることにしたのである。

4. 第3回芸術教育会議の実際

(1) プログラム構成

「第3回芸術教育会議」は、1905年10月13日から15日に「音楽と体操」をテーマにハンブルクの芸術ホールの中にあるマカルト広間にて開催された。リヒトヴァルクは、会議1日目の冒頭で「音楽と体操」について講演し、その冒頭で当会議の目的を次のように述べている (Lichtwark, 1906, pp.25-26)。

「我々の会議の目的は、音楽と青少年教育に関する体操の有能な代表者たちが集まり、彼らの分野の中での考えや要望について自由に討議し、この会議を通して我々の国民に提示することである。」

そしてリヒトヴァルクは、第3回芸術教育会議をとおしてドイツ国民に、一般的に行われている運動を意識させること、第1回第2回会議から芸術教育に関する議論が、第3回芸術教育会議ではどのように展開していくのか、全参加者に提示することを目的としていた (Lichtwark, 1906, p.25-26)。

第3回芸術教育会議の名誉理事には、学長閣下でありハンブルク市長である J.G. メッケベルク、市政府大臣であり高等学校省の指導司祭である W. メレ、市政府大臣

であり高等学校省指導司祭のJ.F.C.レファルドが就任した。

第3回芸術教育会議の準備委員会のメンバーは、第1回と第2回からの継続委員と新たに音楽と体操による専門分野の代表者たちにより構成された。会議準備委員会のメンバーは表1のとおりである。

表1. 第3回芸術教育会議準備委員メンバー

氏名	役職：勤務地
R.バース	教授：ハンブルク
A.リヒトヴァルク	ハンブルク美術館長：ハンブルク
O.エルンスト	Gr.Flottbeck：ハンブルク
K.ミュラー	トゥルネン視察官：アルトナ
M.フィードラー	音楽学校長：ハンブルク
A.ニキシュ	ケヴァントハウスコンサート指揮者：ライブツィヒ
C.フライシュレン	ベルリン
L.パラート	教授：ベルリン－ハーレンゼー
H.フリッケ	学校視察官：ハンブルク
D.リュール	ドイツトゥルネン連盟役員・地方視学官：シュテッティーン
C.ゲッツェ	芸術的教養育成に向けた教員協会理事長：ハンブルク
G.ザルヴェルク	枢密顧問官：カールスルーエ
H.ハーン	ドイツトゥルネン連盟代理理事長：ハンブルク
P.シャルヴェンカ	王室教授・王室芸術アカデミー構成員：ベルリン
P.イエッセン	王室美術工芸博物館図書館長：ベルリン
E.T.G.シェンケンドルフ	州議会議員：ゲルリッツ
J.ヨアヒム	王室楽団指揮者・王室音楽高等学校長：ベルリン
F.A.シュミット	衛生評議員：ボン
L. カルクロイス	王室芸術アカデミー長：シュトゥットガルト
P.シュルツェ	教授：ナウムブルク・ザーレック
G.ケルシェンシュタイナー	第2回芸術教育会議理事長：ミュンヘン
W.ザイドリッツ	枢密顧問官・第1回芸術教育会議理事長：ドレスデン
W.ヴュムバッハ	演習・音楽教員：ハンブルク
J.シュペングル	王室音楽局長：ハンブルク
P.クルムホルツ	参事官・視学官：ワイマール
F.シュタインバッハ	総合音楽局長・地方音楽局長・ケルン音楽学校長：ケルン
H.ヴォルガスト	教頭：ハンブルク
K.ランゲ	大学教授：チュービンゲン
R.レーマン	教授：ベルリン
F.ヴォイルシュ	教授：アルトナ

(Kunsterziehung R. Voigtländer Verlag in Leipzig, 1906, p.10.より作成。)

音楽専門分野の代表者は、M. フィードラー、A. ニキッシュ、P. シャルヴェンカ、J. ヨアヒム、W.K. ヴュムバッハ、J. シュペングル、F. シュタインバッハの7名であった。一方体操の専門分野の委員は、K. ミュラー、H. フリッケ、D. リュール、H. ハーン、F.A. シュミットの5名であった。

会議には、第1回第2回の芸術教育会議と同様に、政府機関や市当局の関係者⁶⁾教

育関係者や芸術家はもちろんのこと、新聞や雑誌の評論家たちも参加した。さらに会議には 45 の連盟、12 のジャーナリムの代表者、62 名の芸術家と学者、153 名の教育者と学校友の会が出席した。会議参加者は全員で 333 名と、一連の芸術教育会議の中で最多となった (Braun, 1957, p.53-54)。

第 3 回芸術教育会議のプログラムは表 2 のとおりである。

表 2. 第 3 回芸術教育会議プログラム内容

1905年10月13日金曜日（場所：芸術ホールのマカルト広間）			
1日目	タイムスケジュール	会議内容	担当者名：勤務地
午前	9:00-	1 音楽と体操	A・リヒトヴァーク:ハンブルク
		2 家庭での音楽育成	R・バトカ:プラハ
		3 芸術的な感覚に向けた教育手段としての唱歌	H・ヨハンセン:キール
		4 コンサートとオペラにおける青少年	R・バース:ハンブルク
		5 音楽的な享受	M・デッツォイアー:ベルリン
午後	15:00-17:30	トゥルネンの公開演技披露 場所：St. パウリ体育館 徒手体操、手具体操、器械体操、輪舞・ダンス	
1905年10月14日土曜日（場所：芸術ホールのマカルト広間）			
2日目	タイムスケジュール	会議内容	担当者名：勤務地
午前	9:00-	1 体育による身体美	F.A.シュミッド:ボン
		2 徒手体操と手具体操におけるトゥルネン	ディーボウ:ベルリン
		3 遊戯と国民的な運動	J・シュパールビーア:ハンブルク
		4 学校の水泳授業	H.フリッケ:ハンブルク
		5 ダンス	G・フーフス:ミュンヘン
午後	15:00-16:00	男子校と女子校での公開水泳授業 場所：リュウベックエアトアー公営プール	
1905年10月15日日曜日			
3日目	タイムスケジュール	会議内容	
午前	8:30-10:15	公開遊戯披露 場所：ハイリゲンガイストフェルデス児童公園 タンバリンバルとファウストバル、ラウンダーズ、陣取り	
		10:30-11:00 場所：ハンブルクトゥルネン連盟のSt.パウリ体育館 走・跳・投による国民的な運動	
		11:30-13:00 公開講演 場所：コンサートホール『ハンブルク』St.Pauli	
		1 音楽的な文化	R・バトカ:プラハ
		2 美学的な教育における体育の意義	K・ミュラー:アルトナ
3 我々の芸術教育会議		C・ゲッツェ:ハンブルク	
午後	14:30-	小学生のためのコンサート ハンブルグ音楽愛好家サークル楽団 指揮者：リッヒ・バース（ハンブルク） 協力：ハンブルグ教員音楽連盟	

(Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig, 1906, pp.11-12.より作成。)

プログラム 1 日目の午前中は、最初に本会議のテーマである「音楽と体操」についてリヒトヴァークが講演を行った。続いて本会議のテーマの一つである音楽専門分野を中心に「家庭での音楽育成」についてプラハの R. バトカが、「芸術的な感覚に向けた教育手段としての唱歌」をキールのパイプオルガン奏者で音楽教員である H. ヨハンセンが、「コンサートとオペラにおける青少年」についてハンブルクの大学教授である R. バースが、「音楽的な享受」についてベルリンの大学教授である M. デッツォイアーが講演を行った。1 日目の午後は、ハンブルクトゥルネン連盟の St. パウリ体育館にて、「トゥルネンの公開演技披露」が行われた。

プログラム 2 日目の午前中は、体操についての講演が行われた。はじめに「体育による身体美」をボンの衛生評議員である F.A. シュミットが、次に「徒手体操と手具体操におけるトゥルネン」についてベルリンの王室トゥルネン教員育成機関長であるディーボウが、「遊戯と国民的な運動」についてハンブルクの教員である J. シュパールビーアが、「学校の水泳授業」についてハンブルクの学校視察官である H. フリッケが、「ダンス」についてミュンヘンの編集者である G. フーフスが講演を行った。午後はハンブルクからリューベックに場所を移し、リューベックエアトアー公営プールにて

男子校と女子高における公開水泳授業が実施された。

プログラム3日目の午前中は、1. 公開遊戯披露、2. 走・跳・投による国民的な運動、3. 公開講演が行われた。公開講演はハンブルクコンサートホールにて、「音楽的な文化」について R. バトカが、「美学的な教育における体育の意義」についてアルトナのトゥルネン視察官である K. ミュラーが、「我々の芸術教育会議」について教員であり雑誌「種を撒く人」の編集者である C. ゲッツェが講演した。午後は、本会議の締め括りとして「小学生たちのためのコンサート」と題して、ハンブルクの音楽愛好家サークル楽団と国民学校男子生徒たちによる公開コンサートが開演された。プログラム1日目と2日目の午前中に開催された各講演の際には、その講演内容について参加者たちとの討論会が実施された。

(2) 第3回芸術教育会議に見る新体操的理念の主張-体操と音楽と美の融合を求めて-

会議1日目の冒頭でリヒトヴァルクは、「音楽と体操は、歌唱もしくは音楽にとって、ダンスや輪舞ののリズミ的な運動が伴う共通の身体的な根源を持っており、この根源は本来高尚で非常に古い関係があるものの、世間一般では実際には評価されておらず、体育授業においての美学的な効果は、本質的に音楽との関連によって達成する」

(Lichtwark, 1906, p.26) と主張した。そして本会議のテーマの一つである「体操」の教育的意義について、体操が身体教育の手段や能力、青少年の健康を獲得するだけでなく、芸術教育に向けても非常に重要な力添えとなると考えた。また彼は、従来の音楽と体育の授業であるトゥルネンについて自身の体験を以下のように述べている (Lichtwark, 1906, p.26)。

「私の少年時代、音楽とトゥルネンの授業を根本的にまじめに考えていなかった。我々は、学校での指導が多かれ少なかれつまらないと評価しており、早期に声変りをしたときの歌唱の時間と、医師の診断書によってトゥルネンの授業が免除されることが嬉しかった。教師の熱狂などどうでもよく、ただ憎まれないようにするだけであった。」

リヒトヴァルクは、自身の体験した学校体育でのトゥルネンが、規律の側面ばかりが強調されており、「そのような身体教育を次の世代は必要としないだろう。」と述べ、新しい思想でのトゥルネンが必要であるとして次のように主張した (Lichtwark, 1906, p.27)。

「成人する前の子どもたちが学んだ昔の遊戯に生命を与えること、自立した決意で最後までやり抜く能力に力を注ぐこと、全身全霊でゲームのルールを尊重すること、勝利者を嫉妬のない賛美で称賛すること、これらはドイツトゥルネンに一つの新しい生存競争に対する心構えをさせる思考様式となるだろう。」

そしてリヒトヴァルクは音楽と体操は、ダンスと輪舞の原型の中に位置しており、生徒たちの自立した人間を育成することに役立つことができると主張した

(Lichtwark, 1906, p.27)。

リヒトヴァルクの講演が終了した後、音楽専門分野の代表者たちの講演が続いた。

ブラハのバトカは「家庭での音楽育成」と題して、家庭の中での音楽育成について講演を行なった。彼は従来音楽教育の主流であったピアノとバイオリンによる一面的な育成に異議を唱え、様々な楽器を導入すること、さらに音楽を楽しむために重要なことは、音感を正確に把握する聴覚訓練ではなく、音楽とより密接な関係を作り上げることであり、偉大な作曲家が彼らの精神を表現し作曲した音楽そのものを主観的に感じ取る教育が重要であることを説いた (Batka, 1906, p.44)。また彼は公開講演「音楽的な文化」の中で、従来の音楽教師に見られる高慢性、虚栄心、自己賛美に異議を唱え、教師は生徒たちに音楽を特定の形式に当て嵌めるのではなく、幅広い基盤で音楽を理解させることを重視した (Tervooren, 1987, p.126)。

キールのヨハンセンは「芸術的な感覚に向けた教育手段としての唱歌」と題して講演を行った。彼はドイツ国民と一般社会に考慮して、「国民学校は、芸術的な教育方法として唱歌の授業を強化すべきである」 (Johannsen, 1906, p.65) と主張し、国民学校での音楽授業における2週間授業の承認、方法論の確立、学校教育にふさわしい唱歌本の開発、情熱ある芸術家と芸術的教養に向けた教員の養成を要望した (Johannsen, 1906, p.77)。

体操の専門分野では、まずシュミットが講演を行った。彼は「体育による身体美」と題して、生理学的な知見から人間の姿勢と身体運動の一つの理想型を提示し、身体美に向けた教育方法について述べた。彼は一つの動きを「幅広い歩幅で、活気あるリズムとテンポで、優美な姿勢で」という課題によって発展させ、身体に負担をかけない方法で、しなやかな体型を作り上げることを目標とした教育を提唱した。そしてこの目標は、美的な上にバランスのとれた運動に寄与することができ、全ての運動の基礎になると主張した。シュミットはまた、トゥルネンのような身体を酷使した方法によって、不必要に歪曲した運動を防止することの重要性を説いた。そして学校体育で実施されているトゥルネンが、身体に対して生理学的知見のない不自然な教育目標で行われており、それを如何に軽快で自信に満ちたものに達成されようとも意味がなく、重要なのは「運動表現の中にある美しさと完璧さである」という極めて高い教育目標を掲げた (Schmidt, 1906, pp.170-171)。

シュパルビアーは、均整のとれた自然な運動として「遊戯と国民的な運動」について講演した。彼は「運動する喜びは、即時に起こる喜びで、創造的な喜びであり、これは現代的な体操の基礎とならなければならない」 (Sparbier, 1906, p.195) と強調した。そして彼は、トゥルネンが本来個々人の運動の欲求や感覚を十分に満たす遊戯領域であること主張し、さらにトゥルネンに創造能力を養う教育を付け加えることを要望したのである (Sparbier, 190, p.186)。

ミュラーは、3日目の公開講演で「美学的な教育における体育の意義」について講演した。彼は新しい美学的な原理とは、美しさに向けた教育を基本方針とした新しいスタイルであり、身体のエネルギッシュな解放と自然な運動形式に伴う自然法則に従った教育方法によって初めて表面化させることができると主張した (Möller, 1906, pp.293-294)。

体操専門分野での公開実技披露（トゥルネンの公開演技披露、公開水泳授業、公開遊戯披露）は、3日間の会議でそれぞれ行われた。

1日目は、トゥルネンの公開演技披露と題して、国民学校の児童たち、トゥルネンクラブに所属している女性や男性たちによる徒手体操と手具体操、器械体操、ダンス運動が披露された。まず、アルトナのトゥルネン視察官であるミュラーの指揮で、アルトナトゥルネンクラブの女性たちが、棍棒を使った簡単な振動運動を披露した。次にトゥルネン教員のデッペが、鉄の棒を使用したいくつかの女性向けのトレーニングを紹介した。さらにトゥルネン教員のジーペルド指導の下、国民学校の子供児童たちが鉄棒での簡単なトレーニングを披露した。シュパルビアーとミュラーは、児童たちによる自然で美学的な運動のまとめとして、軽快で自然に即した走り方をどのように教育することができるか提示した。国民学校の男子生徒たちが、腕立て伏せトレーニングを披露し、アルトナの実科ギムナジウムの男子生徒たちが鉄の棒を腕の振動の運動の手掛かりとして、支柱として、武器としてどのように活用できるか例を挙げた。器械体操と徒手体操を男性たちと男子生徒たちが、跳び箱の演技や跳馬、鉄棒等の演技を行なった（作者不明, 1906, pp.117-119）。

トゥルネンの公開演技披露の最後は、クリューガー、女性のただ一人の講師としてM. ラドツヴィル、デッペとシェールが、音楽と体操に関連させた演技を紹介した。まずクリューガーは、国民学校の子供児童たちを整列させ、拍子に合わせて歩く・跳ねるというステップを中心とした運動を提示した。ラドツヴィルは、子供の遊戯とフォークダンスに関連して、民謡の音楽に合わせたダンス運動を紹介した。デッペとシェールは、シューベルトの音楽に合わせて変化に富んだダンスを披露させた（作者不明, 1906, p.119）。トゥルネンの公開演技披露は、これらの内容を1時間という短い時間で披露された。

2日目の公開水泳授業では、国民学校で実施されている水泳授業が披露された。この水泳授業は、泳法の指導ではなく、児童たちに自分の姿勢を気づかせるために、仰向けとうつ伏せでの蹴伸びをすることで、胸郭を意識させることを中心として行われた。公開水泳授業の最後は、水中でのリレーや綱引きなどの遊戯を男子児童たちによって実施され、水の中に一斉に飛び込んだすべての男子児童たちによるバタ足は、公開水泳授業による愉快的な印象を会議参加者たちに形づけた（作者不明, 1906, p.120）。

3日目の公開遊戯披露では、国民学校や上級学校の生徒たちやトゥルネンクラブに所属している参加者たちが合同で、技術的能力の精通と肉体的能力による気力あふれる緊張と楽しさを、身体的な教養として試みたものであった。ここでは、球技であるファウストバルやタンバリンバル、コルプバル、シュラグバル^⑧、サッカーをはじめ、遊戯として陣取りが行われた。次に走・跳・投による国民的な運動が披露され、棒高跳び、幅跳び、石投げ、砲丸投げ、槍投げ、円盤投げやハードル競走などが、上級学校の生徒たちによって行われた（作者不明, 1906, pp.117-119）。

(3) 第3回芸術教育会議の意義

第3回芸術教育会議は、教育問題として従来の学校体育が公的に取り上げられた初めての会議であった。会議のプログラムからみると、体操専門分野の実践的な公開実

技披露（トゥルネン、水泳、遊戯）が、会議3日間の全行程で披露されたことから、学校体育の改革を目的とする第3回芸術教育会議の意図が見受けられる。会議の準備委員会のメンバーであったL. パラートは、後に雑誌「ドイツ学校改革（Die deutsche Schulreform）」で、トゥルネンに対して以下のように述べている（Pallat, 1920, p.128）

「トゥルネン、それ自身は100年間にわたってより多く育成しているのにも関わらず、未だに芸術に近い関係を獲得してこなかった。トゥルネンでの芸術性はほんの少ししかなく、その多くは造型性に役立つものである。」

パラートの主張する当時の学校体育におけるトゥルネンは、国家経済を支える労働力のために、国家の軍事力強化の必要性から、健康で命令に従順な兵士の養成を目的とした身体形成に価値が置かれていた。教師の指導は、生徒たちが集団の中で号令とともに迅速に動けるように、「規律と秩序」による鋳型化された運動認識で実施されていたのである。この指導方法では、生徒たち個々の身体的特性は無視され、一人一人の個性を抑制した一糸乱れぬ集団運動が尊重されることになる。衛生評議員であるシュミットは会議の中で、生理学的知見のない不自然な教育目標から実施されているトゥルネンに異議を唱え、新しい体操は身体に負担をかけない方法で、美的でバランスのとれた運動によるしなやかな体型作りを教育目標に掲げ、これは全ての運動の基礎となると主張した。この主張は、トゥルネンの国防や産業のための手段化された集団による身体運動や生理学的知見のない身体形成から、個々の身体性に向けた教育と、さらに自らの身体を意識する自己目的化された身体形成の重要性を説いたと言える。

またシュパルビアーは、均整のとれた自然な運動として「遊戯と国民的な運動」を講演し、「運動する喜びは、即時に起こる喜びで、創造的な喜びであり、これは現代的な体操の基礎とならなければならない」と強調した。「規律と秩序」を重視する従来の学校体育では、生徒たちの運動する喜びや、創造的な喜びは皆無に等しく、トゥルネンに創造能力を養う教育の必要性を主張したシュパルビアーの理念は、新しい体育の方向性を示したものであった。同様にミュラーが公開講演で、身体のエネルギーな解放と自然な運動形式に伴う自然法則に従った教育方法の重要性を提示したことも、従来の学校体育によるトゥルネンの運動認識から、新しい認識での体操の在り方を指示するものであった。

リヒトヴァルクは「音楽と体操」をテーマとした講演で、体育授業における美学的な効果は、音楽との関連によって達すると述べたが、その具体例は、1日目のトゥルネンの公開演技披露の最後に、クリューガーの拍子に合わせて歩く・跳ねるというステップを中心とした運動、ラドツヴィルの民謡の音楽に合わせたダンス運動、デッペとシェールのシューベルトの音楽に合わせたダンスを短い時間で紹介したのみであった。パラートは、後に本会議の成果について、「芸術教育会議の枠内で新しい体操を演出するのに体操家や舞踊家の具体例が挙げられず、会議は思わしい結果にはならなかった。」（Pallat, 1926, p.65）と述べている。また、トゥルネンから自然体育に向けたドイツの体育改革に貢献したE. ハルテは、トゥルネンによる公開演技披露について「美学的な自然の革新とトゥルネン的な美的原理を合致させるとき、ドイツトゥルネ

ンでの改革は、その時ただ腰掛けただけであり、それは深刻であった。」(Harte, 1927, p273)と述べている。しかしクリューガー、ラドツヴィル、デッペとシェールによる音楽と体操を関連させた演技披露は、具体例としてはほんのわずかではあるものの、従来のトゥルネンによる学校体育の内容から鑑みると、画期的な試みであったと言える。

本会議を契機として、人間の本質への問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が、リズムと音楽と結びついた人間の美的な基本運動として価値が認められ実体化していくこととなったことを考慮すると、第3回芸術教育会議は、その後の学校体育の改革と新体操促進運動の原点となり、その功績は非常に大きく、意義のある会議であったと言える。

おわりに

本研究の目的は、新体操促進運動が興隆する契機となり、19世紀から20世紀初頭のドイツの学校体育を支配していたシュピース＝マウル方式の体操の克服を目的として、1905年にハンブルグで開催された第3回芸術教育会議のプログラム構成とその内容、そして同会議のもつ意義を明らかにすることであった。本論で検討した結果を整理すると以下のようにまとめられる。

1. 19世紀から20世紀初頭にかけてドイツの学校体育を支配していたのは、トゥルネンと呼ばれるシュピース＝マウル方式の体操で、これは健康で命令に従順な兵士の養成に向けた身体育成の必要性から、「規律と秩序」を重視した集団秩序体操を主としていた。その一方で、19世紀後半から人間の自然性と自由の精神に結びついた遊戯・イギリス産のスポーツ活動と、スウェーデンやデンマークから、医学や解剖学、生理学、衛生学の最新の成果を体操の中に応用し体系化された徒手体操はじめとする北欧体操の伝播、また女子の身体教育の重要性が強調され始めていた。第3回芸術教育会議は、このような状況の中で開催されていた。
2. ドイツ新教育運動の一つである芸術教育運動は、子どもとその能力の最大限の尊重という方向を最も早くに明示し、これをすべての学校改革や教授計画の一原理とするのに決定的な契機を与えた。この芸術教育運動は、3回にわたる芸術教育会議を開催し、その中心的な役割を果たしたのがA. リヒトヴァルクであった。第1回芸術教育会議は、1901年にドレスデンで「造形芸術」を、第2回会議は、1903年にワイマールで「母国語と詩」をテーマに開催された。
3. 第3回芸術教育会議は、1905年「音楽と体操」をテーマにハンブルクで開催された。リヒトヴァルクは、従来の学校体育で行われている「規律と秩序」を重視したトゥルネンを、芸術教育の中で改革するには、音楽とのかわりを通じた表現の発達を目標とした新しい体操によって達成できる主張した。会議では、従来の学校体育のトゥルネンから、生理学的知見をとおして自らの身体を意識する自己目的化された身体形成、創造能力を養う教育を目指す新しい体育の在り方、自然な運動形式に伴う自然法則に従った運動認識による教育の重要性が提示された。またトゥルネンによる公開演技披露では、具体例としてはほんのわずかではあるものの、音楽と体操を関連させた演技が披露され、それは従来のトゥルネンによる学校体育の内

容から鑑みると、画期的な試みであった。

4. 第3回芸術教育会議では、教育問題として学校体育が公的な会議で取り上げられたことは初めてのことであり、この会議を契機として、人間の本質への問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が、リズムと音楽と結びついた人間の美的な基本運動として価値が認められ実体化していくこととなる。第3回芸術教育会議は、その後の学校体育の改革と新体操促進運動の要因となり、その功績は非常に大きく、意義のある会議であった。

【注】

- (1) 新体操諸流派における体操の系譜を明確に整理することは系譜間の近接性から困難をとまうが、おおよそ医学的な機能的効果を主眼にしたデンマーク体操などの北欧体操、演劇的発想から感情の表出を重視した表現体操、音楽リズムと運動リズムを結合させたリズム体操、古典パレエを打破しようとする新たなダンス的発想に基づく芸術体操に分類される。(松本芳明 (2006) 『最新スポーツ科学事典』平凡社, p.626.)
- (2) 第3回芸術教育会議を検討の組上に載せた主な研究は、以下のとおりである。
 - ・音楽教育の分野から第3回芸術教育会議の詳細を明らかにしたもの
 - 工藤千晶 (2012) 第3回芸術教育会議 (ハンプルク, 1905) における「家庭での音楽育成」に関する一考察. 広島大学大学院教育学研究科, 音楽文化教育学研究紀要 XXIV.
 - 供田武嘉津 (1991) 『西欧音楽教育史』音楽之友社.
 - Tervooren, H (1987) Die rhythmisch-musikalische Erziehung im ersten Drittel unseres Jahrhunderts, Frankfurt am Main: PETER LANG.
 - ・体育・スポーツの分野で第3回芸術教育会議を取り上げたもの
 - 菅井京子 (2010) 「ドイツ体操同盟の設立に果たした F. ヒルカーの役割について」『スポーツ史研究』第24号, スポーツ史学会, pp.3-14.
 - Diem, L (1991) Die Gymnastikbewegung, ein Beitrag zur Entwicklung des Frauensports: Herausgeber, Carl-Diem-Institut Academia Verlag.
 - ・教育学の分野で第3回芸術教育会議を取り上げたもの
 - 歡喜隆司 (2004) 「学校改革教育学運動の先駆けとしての芸術教育運動とその民衆学校教授への生徒能動化の刺激 (II) —ワイマール (1903)、ハンプルク (1905) での芸術教育会議の研究—」『教授研究』第25巻第2号, pp.3-13.
- (3) 特に器具を用いた体操は、鞍馬、跳馬、吊り輪、平行棒、鉄棒など今日の体操競技における多くの種目の原点になった。
- (4) イギリスでは、遊びや賭を楽しむ伝統的国民性と産業革命を早く達成し、世界貿易の覇者となったことなどによって、スポーツの近代化を強力にさせた。サッカーがドイツに伝播したのは1875年頃であるが、ドイツサッカー連盟が設立されたのは1900年である。
- (5) Lichtwark, Alfred (1852-1914) はドイツの美術史家である。1886年新設のハンプルク美術館長に就任し、同年「ハンプルク芸術友の会」(die Gesellschaft Hamburger Kunstfreunde) を、1896年には「学校における芸術教育育成のためのハンプルク教員連盟 (die Hamburger Lehrervereinigung zur Pflege der künstlerischen Bildung in den Schulen) を創立し、その活動を通して青少年や成人層における深い芸術理解を促進することに貢献した。また広くドイツの

芸術教育全般においてつねに指導的立場で活躍した。(ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987)『ドイツの新教育運動』明治図書出版, p.227.)

- (6) 政府機関関係ではバーデン、ザクセン-アルターブルグ、エルザス-ローリンゲン、メッツ、シュレスヴィック、カッセルの州政府とハンザ都市ブレーメン、リュベックとハンブルクの政府が招待された。市当局の関係者は、シュレスヴィックとドルトムント、フランクフルト、アルトナ、シャルロッテンブルク、ケムニッツ、ドレスデン、ライプツヒヒ、キール、ザール地方のハレ、マクデブルク、ミュンヘンの代表者たちが出席した。
- (7) 輪舞 (Reigen) は、シュビースが女子の体育のために考案した、音楽とダンスと体操を結合した運動で、幾何学的な美と秩序を求める集団秩序体操である。女子に最も効果的に秩序を与えることができると考えられ、女子体育に強い影響を与えた教材である。
- (8) ファウストバル (Faustball) は、こぶしを用いるドイツ式バレーボール、タンバリンバル (Tamburinball) は、バドミントンに似たイタリアの遊戯、コルプバル (Korbball) は、バスケットボールに似た女子の球技、シュラグバル (Schlagball) は、ラウンダーズと呼ばれる 12 人制の野球に似た球技である。

【参考文献】

- 稲垣正浩 (1987)『最新スポーツ大事典』大修館書店。
- 歡喜隆司 (2004)「学校改革教育学運動の先駆けとしての芸術教育運動とその民衆学校教授への生徒能動化の刺激 (II) —ワイマール (1903)、ハンブルク (1905) での芸術教育会議の研究—」『教授研究』第 25 巻第 2 号, 学習活動研究会。
- 木内陽一、アンドレアス・ペーンケ、小林万里子 (2010)「19 世紀末・20 世紀初頭におけるハンブルクの新教育」『鳴門教育大学研究紀要』第 25 巻, 鳴門教育大学。
- 木村真知子 (1989)『自然体育の成立と展開』不昧堂。
- 鈴木幹雄 (2001)『ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究—芸術教育運動から初期 G・オットーの芸術教育学へ—』風間書房。
- 鈴木幹雄 (1999)「ハンブルクにおける新教育運動の光と陰《教育観の革新》と《リーダー的教師の「苦悩」》との接点に位置する教育改革運動」『神戸大学発達科学部研究紀要』第 6 巻第 2 号, 神戸大学。
- 東京教育大学体育史研究室編 (1964)『図説 世界体育史』新思潮社。
- 中村恭子 (2012)「ダンス教育の展望と課題」『体育科教育』2 月号, 大修館書店。
- 成田十次郎 (1975)『世界教育史大系 31 体育史』講談社。
- 平野正久、長尾十三二 (1988)『新教育運動の生起と展開』明治図書出版。
- ヘルマン・ノール、平野正久訳 (1987)『ドイツの新教育運動』明治図書出版。
- 松尾順一 (2010)『ドイツ体操祭と国民統合』創文企画。
- 松本千代栄 (2008)『舞踊論叢』明治図書出版。
- A. リヒトヴァルク、岡本定男訳 (1985)『芸術教育と学校—ドイツ芸術教育運動の源流—明治図書出版。
- Batka, R (1906) *Musikpflege im Hause*, In: *Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des 3. Kunsterziehungstages in Hamburg am 13., 14., 15. Oktober 1905*, R. Voigtländer Verlag in Leipzig.

- Braun,G (1957) *Die Schulmusikerziehung* in Preußen, Kassel/Basel.
- Diem,L (1991) *Die Gymnastikbewegung*. Herausgeber, Carl-Diem-Institut Academia Verlag.
- Harte,E (1927) *Die Verschiedenen Gymnastikschulen*,In:Die deutschen Leibesübungen.Großes Handbuch für Turnen, Spiel und Sport, Berlin,Wilhelm Andermann Verlag.
- Johannsen,H (1906) *Der Schulgesang als Bildungsmittel*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Konrad,L. (1902) *Das Wesen der künstlerischen Erziehung*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Lichtwark,A (1929) *Die Einheit der künstlerischen Erziehung*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Lichtwark,A (1906) *Musik und Gymnastik*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Möller,K (1906) *Bedeutung der Leibesübung in der ästhetischen Erziehung*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Pallat,L (1920) “Kunsterziehung”,*Die deutsche Schulreform*, Leipzig.
- Pallat,L (1926) “Gymnastische Körperbildung”,*GYMNASTIK*, Nr.6.
- Schmidt,F.A (1906) *Körperschönheit durch Leibesübungen*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Sparbier,J (1906) *Spiele und volkstümliche Übungen*, In: Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.
- Tervooren, H (1987) *Die rhythmisch-musikalische Erziehung im ersten Drittel unseres Jahrhunderts*, Frankfurt am Main:PETER LANG.
- 作者不明 (1906) *Vorführungen aus dem Gebiete des Turnens, Jugendspiels und Schwimmens*, In:Kunsterziehung. R. Voigtländer Verlag in Leipzig.

(2013 年 1 月 7 日受理)